水谷武彦のバウハウスを通して《近代》を見る

bauhaus100Japan

「きたれ、バウハウス」展に寄せて

2019.11.24　　長田謙一

バウハウス100年

- 第二次世界大戦開戦以後80年
- ベルリンの壁崩壊30年　　つまり戦後冷戦体制終焉30年

- バウハウスは、この100年の社会変遷・変容に深く影響され、さらに言えば、それぞれの社会変容に呼応した象徴的存在として機能してきた。
- 別言すれば、バウハウスは、それぞれの社会変容の中で、それぞれに見合った神話を帯びて聳立してきた。
- バウハウス100年は、それらの神話をぬぐい、あるがままを改めて見直す機会となる。

バウハウス展のポスターが、オレンジ・レンガ色であること。

- 90周年のときのバウハウス展のカタログが、深紅であったことを受け継ぎ、また、今年最大のバウハウス100企画であるバウハウス・イマジニスタ展のシンボルカラーが朱色であることをも継承して、ひところのバウハウスイメージが大きく崩されたことの表れである。
- ミュンヘン・オリンピックのヴィジュアルは、白薔薇とウルム造形大学を背にしたオトル・アイヒャーのデザインの中で、赤と黒という強い、とりわけナチスを想起させる色の対極の、淡く涼しげな色彩の中に展開された。

「モダンデザイン」の成立
その逆説A

口紅から機関車
まで

Raymond Loewy

‘Never Leave Well
Enough Alone’

デモクラシーのア
ポロン

Walter Adolph
Georg Gropius

‘Apollo in the
Democracy’

「モダンデザイン」の成立
その逆説B

Herbart Bayer

独逸の労働/ドイツの民族

Deutsche Volk
Deutsches Arbeit 1936

勝利への道

Road to Victory 1942

デモクラシーのアポロン

Walter Adolph Georg Gropius

‘Apollo in the Democracy’

「モダンデザイン」の成立
その逆説C

Pruitt-Igoe(1956)

WT Center

Minoru Yamasaki

「近代建築の失敗」とされた

『国際建築』Walter
Adolph Georg Gropius

‘International
Architecture’

脱色された＞バウハウス

- Weltanschauungと社会的ユートピアの除去
- Vgl.Margret Kentgens-Craig”The Bauhaus and America” 1993,2001
- しかし、それは実は既にナチス時代に入る前に果たされていた　　１９３０年代初頭

- ナチスーモデルネ　を許したbauhaus

- ＜Exil＞
- アメリカにおける再脱色

1968. Stuttgart : wuettembergischer kunstverein,
London : Royal academy of Art
Amsterdam : stedelijk museum
1969 Paris : musée d'art modern
Chicago : Ilinois institute of technology
Toronto : art museum of Ontario
1970 Passadena : art museum
Buenos aires : museo de bellas artes

50

Buchdesign:H.Bayer
（報告者所有）

50周年記念展

1971. 2.6-3.21
東京国立近代美術館

「冷戦」の中で

- １９４９以前　民主主義と社会主義の精神
- １９４９以後　「無国籍」「形式主義」
- １９５１　SED　５「反形式主義闘争」
  抽象表現主義とともに
  アメリカ無国籍主義の「頽廃」
- 1961　Zentralinstitut f. Formgestaltung
  bauhaus再評価
  「社会主義bauhaus」再発見
- 1976　dessau bauhaus再建
- 1980er　20年代美学の再検討　K.Hirdina, L.Kuehne

Vgl.Paul Betts, Wolfgang Thoener

Junge Menschen,
kommt ans
Bauhaus!

きたれ、バウハウスへ！
わかものたちよ

水谷武彦

- 1898年 - 1969年
- 1921　東京美術学校図案科第二部（建築）卒業。同校助教授。
- 1922　平和記念東京博覧会　文化村　生活改善同盟　水谷も「金賞」受賞
- 1923　早稲田大学大隈講堂建築設計競技　2等
- 1927ー1929　ドイツ留学（文部省給付留学生）　はじめベルリンのReiman　Schule入学。優秀な成績で、記念誌に作品掲載。ついで、バウハウス入学。ハンネスマイヤー時代の建築で学ぶ。機関誌に作品や人物が紹介される。
- 1930　帰国。東京美術学校建築科助教授にもどる。「構成原理」担当。東京美術学校にバウハウスを紹介。熱心な学生を支援。評論、作品（鋼管家具）等を通してもバウハウスを紹介。しかし、東京美術学校での活動は制限された。
- 学外で、川喜田煉七郎の新建築工芸学院で、その教育立ち上げにかかわる。
- 1945　東京美術学校改組で罷免。東京府立工業中学教師に。
- 東京都立大学設立時に、同校教授（図学）となる。

- 長田謙一「水谷武彦と失われたバウハウス」　　日本近代デザイン史」美学出版　所収

1926年　ベルリンへ　目玉と絵筆のロゴ reimann Schule　に入学

- 文部省派遣海外研修
- 今日ならあらかじめ派遣先を決めて初めて派遣
- まずベルリンへいき、それから研修先を探した
- ベルリンのSiedlung等新しい建築をみてまわる

ライマン学校を発見

- Reimann　Schuleを見つける

- 折しも25周年記念の記念誌作成
- 水谷の作品2点が掲載される

- それをいわばポートフォリオに入れてバウハウスに
- 折しもバウハウスはまさにデッサウ校舎落成、新しいバウハウスの出発を迎えるときであった

ベルリンで開かれていたバウハウス作品展

- それほど強い魅力を感じたわけではない
- 「バウハウスは作品の外見からはわからない」

- しかし、ベルリンでもバウハウスは大きな関心を呼んでいたのを受け、水谷もデッサウに赴く

- 折しも会議に、グロピウス以下教員たちが集合している日に面接に出向く

- 1927年夏学期から入学

Bauhaus機関誌
1928　２･３合併号

１９２8年当時の
教師陣
とりもなおさず、水谷が直接参加した授業、かかわった教員たちが同誌に登場

水谷の作品、そして水谷自身の姿も登場
水谷はバウハウスの学生たちの中でも優秀で人気もある学生であった

復刻版（報告者所蔵）

1927年夏学期

- 64名の入学者の一人

アルバースの「穴の開いた紙」

- 「自分の感覚的な、装飾的な作品と比較して忽然と悟りを開く思いをした」「穴を感覚的に美的に開けるのではなく、機能的に開ける方向がバウハウスに一致している」
- それを教えるのではなく、各自が制作し且つ皆で共同して探求していく場

カンディンスキーの授業

- 美術・造形をシュパヌンクによる表現として理解。
- 「将来藝術は形態や色彩もなしにシュパヌンクのみで構成されうる可能性」
- クレー、モホイ・ナジの授業
- シュレンマーの講義や舞台

1927年冬学期+1928年夏学期そして冬

- 家具・木材werkstatt(ヴェルクシュタット：工房・工場)

- 27年冬19名のうちの一人　　マルセル・ブロイヤー
- 28夏21名の中の一人　　アルバース

- 28年冬　　建築　　ハンネス・マイヤー他

Weissenhofsiedlung　－Stuttgart
1927　ドイツ工作連盟主催

- ミース・ファン・デル・ローエ　全体計画
- コルビュジエ、シャロウン、アウトらとともにグロピウスも参加

- 水谷も見学に
  （絵葉書が残されている）

シュレンマーのダンスを見、各種のフェスタに参加

- あるフェスタの際にはカンディンスキー宅に、
- 別のフェスタの時にはクレー宅に、学生代表として案内状を持参して話を交わす

一年間の滞在延長

- Bauhaus機関誌の作品掲載を報じ、バウハウス最低限の全課程を終えるために一年の延長を文部省に申し出る。

- 最後に建築家に所属
- ベルナウ　全ドイツ労働組合総連合ASGB連合学校建設に取り組むバウハウス建築科を経験

国際美術教育会議Int.Cong.f.Art Education, Drawing and Art Applied to Industry/美術教育展覧会 1928.7.29-8.12 チェコ共和国 Prag

第2部会　工芸学校改革
ヨーゼフ・アルベルス：バウハウスについての報告

第4部会では
チゼックの報告も

日本からは文部省派遣
石野隆（美校/美教）・岡登貞治・霜田静志（明星学園）
これに
水谷武彦（滞独）・内藤秀因（滞仏）・出島啓太郎

石野隆『欧米最近の図画手工』1930　（同書解題：山木朝彦　**【日本美術教育主要文献解題】**）
霜田静志『児童画の心理と教育』1968、茂木一司他「F.Cizekの美術教育に関する調査・研究（1）」1988

1929年アメリカ経由で帰国
1930.1.8　東京美術学校に帰国報告　復職

バウハウス紹介の多数のエセー・講演

1930.10.24-25　学生建築研究会「最小限住宅」展
創美会（美校）展示
東京朝日新聞社ギャラリー

吉村順三（1931）、梅田良雄（1932）らの卒業
制作（東京藝術大学蔵）へのインパクト

アサヒグラフ
（千葉大学図書館蔵）

1931.6
第1回生活構成展　　文化学院
川喜田煉七郎らとともに、生活構成研究所立ち上げに参画

草創期の日本の「構成教育」に大きな関わりを持つも、
途中から関わりは見えにくくなる

東京美術学校　授業「構成原理」そして美術・デザイン教育に献身

- 清家清等の残した受講ノート
- 柳宗理も受講者の一人

- 戦中、戦後、学内外の美術教育研修会などで講師
- ラジオで構成の講話も

- 戦後は、一気に高まったデザイン教育の振興に尽力
- テレビでデザイン教育の番組にも出演

水谷武彦のバウハウス経験とその日本での展開についての

- 失われた「バウハウス日記」

- 残された構成のマニュスクリプト等から、可能な限り再現するという課題については、別途取り組む予定

東京都立大学開学期の建築家常勤講師
東京美術学校・日大他で非常勤講師

画家として　「自由美術」等で活躍

アルバースの下へ留学の計画が進んでいたが、グロピウス来日の準備にあたるため渡米は断念

（

「グロピウスとバウハウス」展

とグロピウス来日　　1954

晩年最大の事業となった。

しかし、それもなお、冷戦のただなかのことであった。